

■微量要素を何で施すか

有機肥料は化学肥料より良い味が出るのでよい、とはいえますが、有機肥料を与えていれば完全であるから養分は足りていると思う生産者が多いとの話。現在の農業体系は有機、慣行の別なく収奪型であり、ほおっておけば微量要素は枯渇していきます。一般に地力と言われる腐植にしてもおなじ。人為的に土を豊かにするための不断の投入が必要とのこと。そして微量要素については篤農家といわれる人でさえ見落とされがちだそうです。身の回りの微量要素供給源として紹介されたのは海藻と、種ができる前の雑草がいいとのこと。植物の生理を知った上で、足りていないものを視野に入れる必要があります。

にんじん

夏のにんじんは春の発芽がカギ

常に会員さんの人気お野菜ランキングの上位にいるのが「にんじん」。らでいっしゅぼーやでは周年のお届けができるよう、季節ごと、産地ごとの細かな作付けを進めています。8～10月の季節はまだ手うすの状態。この期間に出荷するのが、春4月から種を蒔く北海道や東北、高冷地の生産者。7月29・30日、北海道の富良野ににんじん生産者35名が集まり、作物別技術交流集会在開催されました。



北海道の畑の広さは圧巻。「除草は人を雇う」と太田順夫さん（右）。左は代表の間山幸雄さん

■発芽率を高めよう！

今回のテーマのひとつは「発芽率向上」。アンケートによると北海道の生産者の発芽率の平均は約75%、秀品率は70%であり、作付から見ると50%程度の収量となっています。この数字をいかに上げていくかがポイントです。どらごんふらい・太田順夫^{のぶお}さんの話によると、富良野のあたりでにんじん栽培に最適なのは5月中旬播種の9月収穫という作付けパターン。8月の出荷にあわせるためには、北海道では少し早い4月から播種しています。

会議中出された発芽の要因は、均一な深さへの播種、水分、温度です。2番目に圃場見学をさせていただいだらごんふらいの布施芳明^{のぶあき}さんの畑は、丘陵地にあるため傾斜により播種深さを均一にしにくく、機械蒔きでは改善は難しいとのこと。またかん水設備がない場合、播種後の降雨が発芽を左右するため、雨が降りそうだなと思った時に播種を行なうそうです。温度については、播種後パオパオなどの被服資材を使用して、保温や降雨による流亡を抑制できるという話でした。

■雑草を持ち込まない

作業時間で大きく時間を割くものが「除草」です。あゆみの会の宮城清司

さんは、1つのベットの3条植えをして、除草は通路だけを取るようになっています。またおぼあさんから「(雑草



発芽と除草はにんじん生産者の大きな課題。そっちはどう？山中哲也さん（右）とどらごんふらい布施芳明さん。

を)畑に残すと、10年は出る」という話を聞かされ、除草した雑草は必ず圃場外へ持ち出す習慣がついており、年々雑草の発生は少なくなっているとのこと。圃場内に種を持ち込む要因であるきゅう肥は、種を死滅させる65℃以上で発酵させる必要があります。

最後に農産課長横山より「同じ経費と手間をかけても品質が違ってきます。もっと生産者が効率的に良いものを探めていかないといけないし、会員さんもついてきません。皆さんのやり方を少しずつ工夫していただきたい。他の技術を聞いて少しでも自分の畑に試してみると、そこから効率性を求めていただくと、お互いにニコニコあえる出荷体になれます。また11月にお会いしましょう！」11月の勉強会の宣伝をしていただき、終了しました。（事務局 鈴木）

好きなだけ、知りたいときに

Drソイルのご紹介

Drソイルは、「移動式ミニ土壤検定室」です。昔から、農産物生産の基本は土壤検査からと言われていたのですが、この検定器は現地で分析ができるように、器具・試薬1式が携行に便利な木箱に収納されています。

検定できる項目は、pH、アンモニア態・硝酸態各窒素、可給態リン酸、加里、石灰、苦土、可給態鉄、交換性マンガ、塩分、の10項目です。

また本来の土壤分析は、分析結果を得るまでに面倒な手順が必要ですが、

本検定器は簡単な操作で結果が得られるよう、器具・試薬に独自の工夫がされており、合わせて、分かりやすい操作手順書と、分析結果活用の手引き書が添付されており、安心して分析が進められます。（富士平工業(株)農産機器部・廣瀬様より）

らでいっしゅぼーやは9月より、簡易土壤分析キット「Drソイル」（富士平工業(株)）のRadix会員向け販売を開始。同時に事務局で購入者補助を実施します。